

1. どのような山をどのように歩いてきたのか

(1) 54歳 山小舎をもつ

・山小舎”山花開”

27年前、いろいろ検討した末に八ヶ岳西麓蓼科高原(長野県茅野市)の落葉松人工林に土地を借り、生涯最大の贅沢をして山小舎“山花開”をもった。

東京郊外のコンクリート集合住宅から2時間余の運転で着き、1年の1/4を過ごし、その2/3には来客があり、望外の愉しさを得た。この愉しみのほとんどは非日常の世界に身を置き、自然の中で体を動かすことによってもたらされる。2年後に始めた山歩きもその延長上にあつたのではないか。



・山小舎の愉しみー山小舎をつくる

ログハウスは、フィンランド・パイン(松)をキットに加工して組み立て、これを解体して梱包し、遠路蓼科まで運び、昭和の初めに植栽されたカラマツ(これも松)を伐採した林地にあつという間に組み建てられた。口惜しいことに日本にはカラマツでログハウスをつくる技術は開発されていない。

山小舎の外構は好みに合わせ手づくりした。

まず伐採したカラマツを工務店に太鼓挽きしてもらい、大きなテーブルとデッキを、次いで焚火をし、その燻で BBQ する炉から物置を兼ねた車庫、陶芸窯、薪小屋、門柱、椅子、コガラの巣箱まで手づくりした。



手づくりしたデッキとテーブル

車庫:石を積んで敷地を拡げ、骨格材を友人と肩で担ぎ上げ、左右の樹にロープで確保して屋根を葺いた。



・山小舎の愉しみ—四季が鮮やかに移り、花が咲き、生きものが集まる



春



秋



夏



冬

戦前のカラマツ植林地が拓かれて植生が回復し、何十種の花が咲くようになった。増えた鹿がこれを1草も残さず食べ尽くした。



小鳥でもっとも多いのは、コガラ類である。巣箱を作ったことから毎年 2 番が営巣した。ヒトを恐れず、寄ってくる。



Hさん撮影



下足棚の靴の中にヤマネが寝ているのにはびっくりした。また、ここの靴等の片方をキツネが隠すいたずらには参った。

鹿の食害はひどい。草花は全滅、樹はマユミ、イチイ、モミの順に枯らされている。

カモシカも時々悠然と現れる。



靴棚の靴の中に寝ていたヤマネ



子供は互いに恐れない

・山小舎の愉しみ一朋有り遠方より来り、焚火し、山花開く

若いとき仕事で折衝して以来親しくしていた今は故きYさんが、遠路を新鮮な魚を携えてもって山小舎を訪ねてくれた。二人で火を囲み、酒を飲みながら山小舎に名をつけようということになり、その場の感じから”山花開”と即決した。

李白の詩

両人对酌して山花開く

一杯一杯復一杯

我酔うて眠らんと欲す卿しばらく去れ

明朝意有らば琴を抱いて来たれ

から借りたものである。

由来通り来客があり、焚火し、山花が開くことが多い。



・山小舎の愉しみ一創る

陶芸窯：凍結浮上を防ぐため基礎に 2 トンの砂利を敷き固め、1 トンのコンクリートを打設した。これらの道路からの小運搬はきつかった。



H さん撮影

陶芸窯の薪づくりは相当の体力と時間を要する。

若い女性が薪割に熱心であるとは想像もしなかった。原田マハ『生きるぼくら』(徳間文庫)の中村つぼみも薪割しているではないか





創る材料は周りにいくらでもある。



・山小舎は山歩きのペース・キャンプ

気儘に山歩きを始めたのも、初めて雪山を歩いたのも、アイスクライミングやヴァリエーション登攀を習ったのも八ヶ岳である。また 25 年間の山歩き回数の 4 割強が八ヶ岳であり、私の山歩きの根っ子に八ヶ岳はある。

なかまもここに集まり、下山後はここで山の疲れを癒し、団欒し、次の計画を練る場となる。この雪撥ねは独りでは一日仕事であるが、なかまのおかげであつという間に終わった。



[\(目次に戻る\)](#)

[\(次項に進む\)](#)